



提言

日本にとっての京都、
世界における京都とはなにか

京都百年考

文化芸術都市の創造にむけて

総論

京都から始める
日本再生

提言Ⅰ

京都百年のビジョン

提言Ⅱ

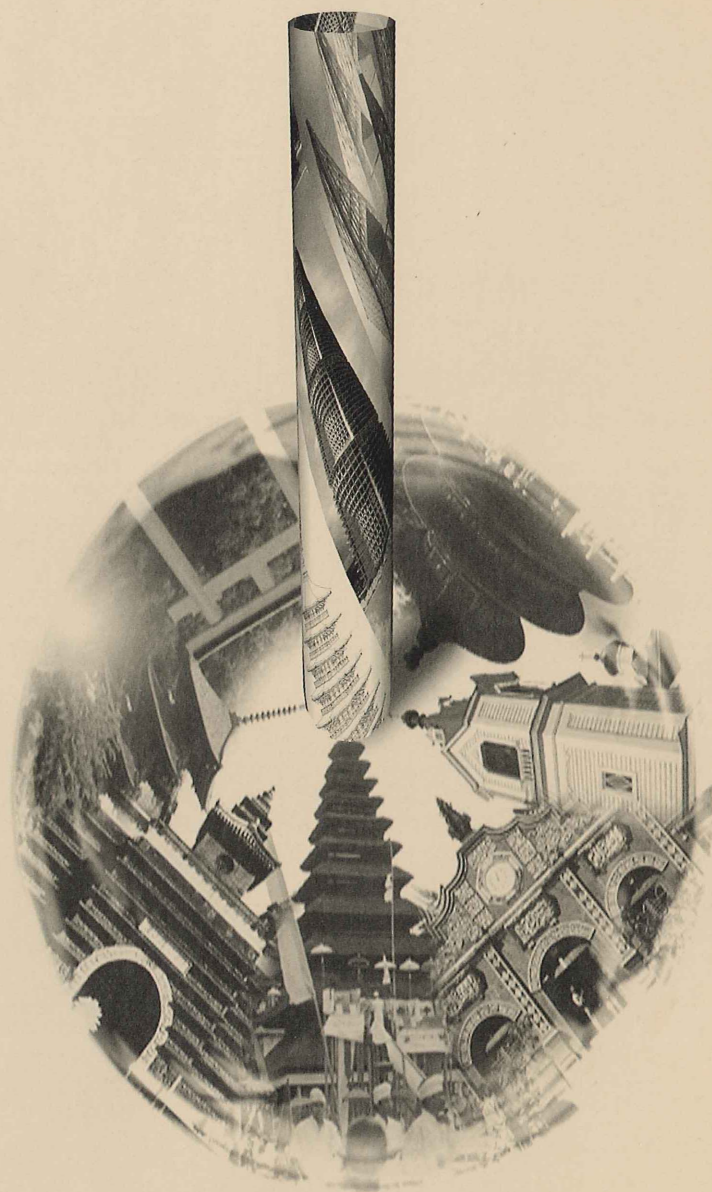
千年の都の具現

提言Ⅲ

宗教・芸術・学問の
都の再興

提言Ⅳ

京都からの情報発信



2003年10月

社団法人 京都経済同友会

21世紀委員会





提言にあたって

私たち社団法人京都経済同友会では、今後「21世紀の京都づくり」を考える上でもう一度、京都が京都たる由縁、すなわち京都が日本人の“心のふるさと”として存在する意味合いについて深く掘り下げてみたいと、平成14年度において山折哲雄先生（国際日本文化研究センター・所長）を座長に「21世紀委員会」を立ち上げました。

メンバーには学者や文化人、さらにはマスコミや行政関係者など外部有識者の方々にもご参画いただき、これまで「文化芸術都市・京都」、「宗教都市・京都」、「大学都市・京都」の視点からそれぞれ集中的に討議を深めてまいりました。本提言は、その討議の場において浮かび上がった主要な意見や提案を今後30年、50年、100年のスパンで京都の都市づくりに生かすべく、『京都百年考』の提言として取りまとめたものでございます。

1

我が国の都市は、戦後、近代化が推し進められるなか、ある意味において効率主義、機能主義に陥り、その結果としてそれぞれの地域の歴史性や伝統文化、精神文化性に裏打ちされたせっかくの持ち味をおろそかにしてきたように思えてなりません。街なかに立てば日本列島どこにいても大して変わらない——国民の“まほろば”であり“精神文化”の地でもあるこの京都が、はたして同様の都市であってよいものかどうか？ 京都を「日本の文化首都」として位置づける私たち社団法人京都経済同友会は、その一点の思いから本提言の実現化を今後、行政ならびに国の政策関係者に強く求め続けていく所存でございます。

皆様方のご理解とご協力を心からお願い申し上げます。

平成15年10月

社団法人 京都経済同友会

21世紀委員会

平成14年度委員長 吉田忠嗣





もくじ

総論 京都から始める日本再生

■提言Ⅰ 京都百年のビジョン

提言Ⅰ-1 「京都百年のビジョン」を策定する

提言Ⅰ-2 「文化首都特別措置法」の制定を求める

■提言Ⅱ 千年の都の具現

提言Ⅱ-1 文化首都にふさわしい都市づくりに努める

提言Ⅱ-2 歴史的名勝を再建する

提言Ⅱ-3 木造建築による21世紀のランドマークを

■提言Ⅲ 宗教・芸術・学問の都の再興

提言Ⅲ-1 文運推進機構「京都会議(仮称)」を創設する

提言Ⅲ-2 京都を「文明」の思索と実践の拠点に

提言Ⅲ-3 国際宗教研究所を設立する

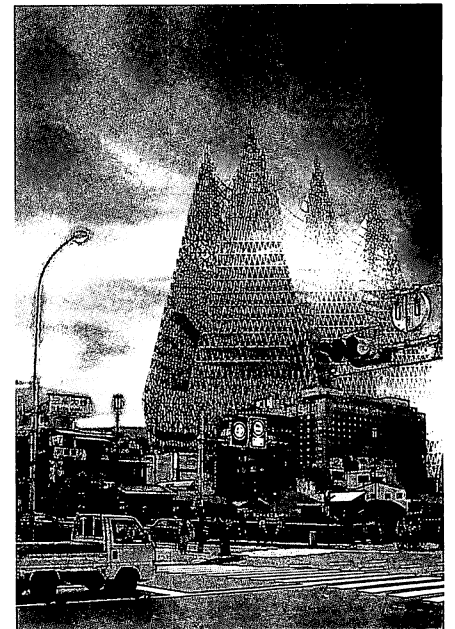
提言Ⅲ-4 生命倫理のための国際機関の設立と誘致

■提言Ⅳ 京都からの情報発信

提言Ⅳ-1 情報を恒常的に発信する組織をつくる

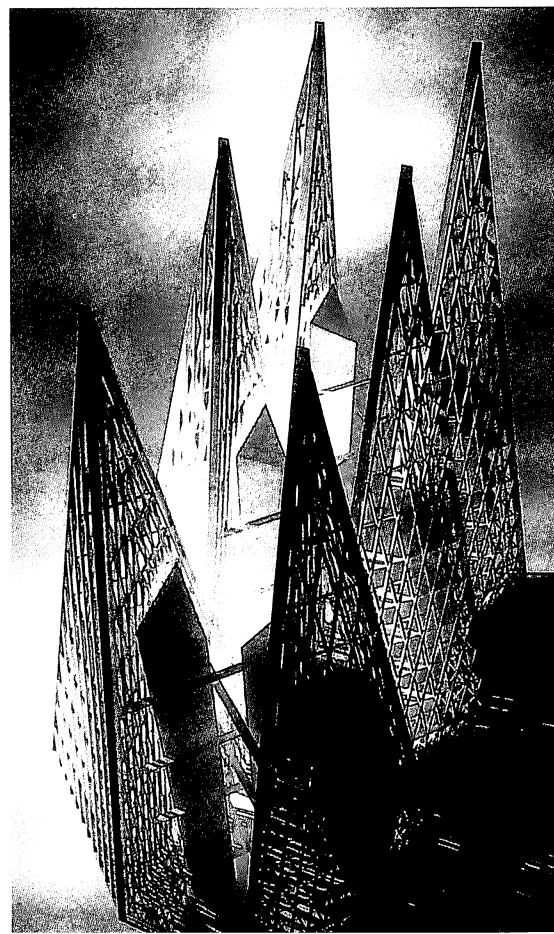
提言Ⅳ-2 21世紀の祭りをつくる

提言Ⅳ-3 インターネットによる情報発信を推進する



建築家・高松伸氏(京都大学教授)が提唱する木造の京都市庁舎案。高さは180m。現市庁舎と市消防局の範囲を想定している。写真は川端通三条から見たコラージュで、手前は高さ60mの京都ホテルオークラ〈写真提供・Nacasa & Partners Inc.〉

木造による高層建築案(模型)。
外壁面を木格子にすることで
内部空間を構造から解放して
いる。集成材を使用し、最下
層のもっとも太い部材でも
70cm角ほどで、「清水の舞
台」の脚部部材とほぼ同寸法





総論 京都から始める 日本再生

いま、日本は意気消沈の底に低迷している。国民の志は方向を失い、夢と希望を育む意欲すらしぼみかけている。このままの状態、わが国の政治と経済ははたして真の活気を取りもどすことができるのだろうか。われわれは今日、大いなる不安のなかにいる。日本の未来にむけて、ただ不確かな懷疑の眼をあげるのみでたたずんでいる。

その懷疑と不安の渦中であって、われわれはあらためて日本再生のための精神基盤を築くべき時が来ていると考える。2,000年におよぶわれわれの伝統文化からいかにして学び、そうすることでわれわれ自身のアイデンティティをいかにして確立するか、その方途を探るための土台づくりである。それは日本列島を彩る豊かな自然との共生をいかにして実現するか、そのための根拠地形成という仕事でもある。

日本人の 精神基盤の 再構築が 日本再生の基礎要件

このような構想を具体化する上で、京都ほど最適の地はないのではないだろうか。

何よりも京都には、平安の昔から千有余年にわたって都でありつづけた伝統がある。またこの地には、比叡山をはじめとし

て仏教の代表的な本山のほとんどが集中し、古代信仰を今日に伝える由緒ある神社が鎮座ましましている。しかもその「仏」の領域と「神」の領域がともに手をたずさえて共存するという柔軟なシステムが、長い年月にわたって形成・維持されてきたのである。

平安時代に350年もの長期にわたる平和の状態が可能となったのも、そのためだったのではないだろうか。都の中心をなす天皇の権威と寺社協力の体制が調和的な関係を取り結び、それを通してこの王城の地における政治的・経済的な繁栄が保証され、芸術文化の花を咲かせる精神的土壌が生みだされることになったのである。京都は、民族の心を形づくる美と信仰の伝統が生きつづけ、政治の原型を刻みだすエートスを育み、経済活動を産出する豊かな地下水脈を保ってきたと言っているといえるのである。

科学技術や 社会科学の偏重から 伝統芸術に息づく 精神の復権へ

しかしながらふり返って考えてみると、この日本は明治以降、科学技術と社会科学が現在にいたるまで国家建設の中心に据えられてきたことに気づく。今日まで変





わることなくつらぬかれてきた「文明開化」の路線である。その基本路線は第二次大戦後になっても、いささかも変化することがなかった。欧米の産業社会の仕組みを学び、それに倣うための科学技術、そして第二次大戦後は近代デモクラシーの精神を学習するための社会科学、である。

その両輪に支えられた社会システムが、日本の国家を「近代化」の軌道にのせる上で避けて通ることのできない基軸であったことはみとめよう。しかしながら、おそらくそのことによってわれわれは宗教、芸術、文化の領域に関わる重大な人間的な課題をいつのまにか軽視し、知らず知らずのうちにそれを国民教育の周縁部分に追いやってきたのである。

しかし今日、日本の社会が大きな曲り角にさしかかっていることは、さきにのべたように誰の目にも明らかである。教育現場を含め、あらゆる社会の分野にわたって荒廃と混乱の度が深まっている。そしてその状況に重なるように、モラルの回復、精神の復権の声があがるようになった。過度の科学技術重視にたいする反省の声である。社会科学偏重にたいする軌道修正の叫びである。芸術文化への渇きのような関心が高まってきたのである。伝統芸術に今なお息づく精神性を再評価しようとする動きであると言わなければならない。

京都こそ 「日本のまほろば」、 「日本人の魂の ふるさと」

このような時代の動きにふれるとき、われわれはあらためて、この京都の地こそま

さに「日本のまほろば」、すなわち「日本人の魂のふるさと」と思わないわけにはいかないのである。考えてもみよう。たとえば日本人の心をつくり上げてきた祭りは、もともと魂の祭りであった。なかでも大切なのが冬至の時期に行なわれるもので、それがすなわち、われわれの生命の源である魂を鎮めて強化する鎮魂の祭りであった。もう一つが、暑熱の時期に行なわれる疫病払いと怨霊鎮めの祭りだった。京都の祇園祭がそうした信仰にもとづく祭りから出発した、もっとも由緒ある祭りであったことはいうまでもない。

京都という都の中心が日本列島の各地に小京都を生み出していったように、祇園祭もまた日本の祭りの原型として全国津々浦々に同心円状に広まっていった。あえていえば、その怨霊鎮めの手法を駆使することによって社会の秩序を維持し、政治の混乱を收拾することが可能となったのである。平安時代に350年の「平和」が実現した背景の一つに、そのようなことを考えることができるのではないだろうか。

奔放な創造性と 豊かな国際性をもとに 芸術・芸能・宗教の 花を開かせた京都

その祇園祭を美しく飾る山と鉦には、周知のように新奇な外来文化の粋と時代を拓く技術の精華が満載されている。目も饒なモダンなデザインと、あっと言わせる趣向によって、都人たちを襲う怨霊たちを封じこめようとしたのである。そのユーモラスな着想がなんとも楽しい。自由奔放な町衆の想像力に目を洗われるのである。





そのためであろう。時代を越えて形づくられてきた祇園祭の宗教芸術の数々を眺めていて思い起こされるのが、まず奈良天平時代の正倉院芸術である。西方の文明がユーラシア大陸を経てこの日本列島に驚異的な波動をおよぼした最初期の歴史遺産である。ついで平安時代に入って、空海がもたらした絢爛豪華の密教芸術を挙げなければならない。あの時代でもっともモダンで、しかも珍奇な意匠にみちみちた運動だったと言っていいだろう。そして16世紀、キリシタンの上陸によってもたらされた南蛮芸術の衝撃が、つぎにくる。

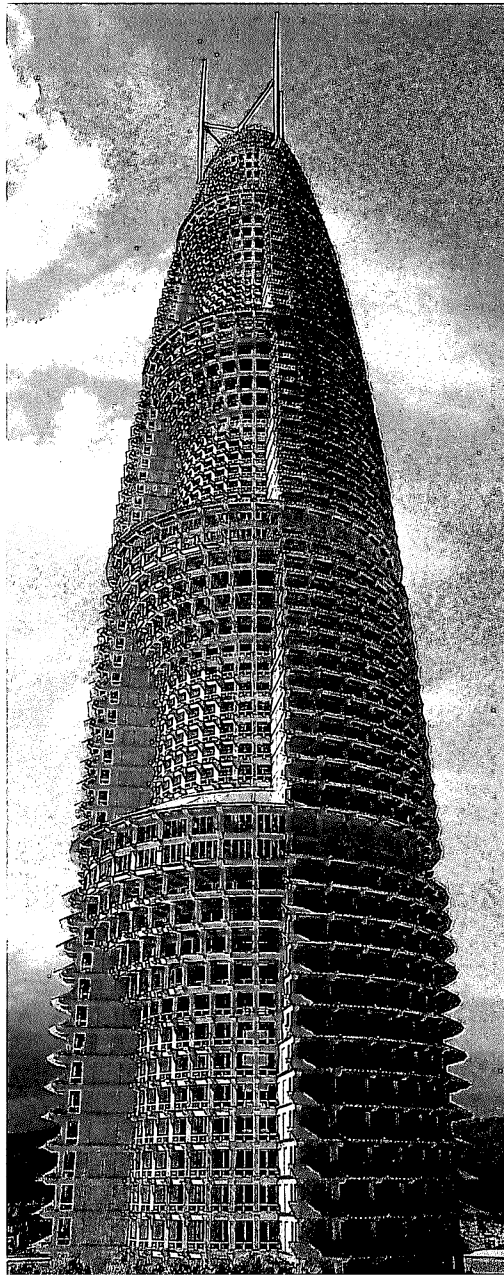
正倉院芸術、空海の密教芸術、そして新来の南蛮芸術こそ、まさにこの日本列島における三大国際芸術運動と言ってもいいのではなかっただろうか。このように考えるとき、われわれの京都の祇園祭が、まぎれもなくその奥深い伝統のなかから生みだされた摘出子だったことがわかる。モダンな祇園祭である。外の世界に開かれた国際性豊かな祇園祭である。

木造100メートル、 人類のための 「心の塔」で 未来の風景をつくる

それに加えてもう一つ言わなければならないことがある。祇園祭を心のふるさとにしてきた町衆の魂についてである。祇園祭の目を奪う飾りつけと意匠を支えつづけてきた人びとの、心のよりどころについてである。その心の風景が、さまざまな物語や主題を通して祇園祭の山や鉦のなかに深々と植えこまれている。先に、この京都の地こそ「日本のまほろば」、「日本人の魂のふ

るさと」と言ったゆえんである。

その京都の中心的な一角に、われわれは今こそ構想を新たにして、人類のための「心の塔」とでも称すべき一大文化総合機関を建設しようというのである。ここであえて比較をすれば、中国は西安における大雁塔、フランスはパリにおけるエッフェル塔、さらにアメリカはニューヨークにおける自由の女神像を挙げることができるが、しかしわれわれはさらにすすんで、人類の未来を約束する「心の塔」の建設を構想しているのである。そしてその建設を通して、国内はもとより世界にむけて新しい世紀のモラルと希望を発信しようというのが、われわれの切なる願いなのである。



建築家・横内敏人氏の
木造超高層建築の基本
計画。地下3階、地上
72階で、地上339m。
基礎と地下躯体は鉄筋
コンクリート造で、地
上躯体は木造





提言 I

京都百年のビジョン

21世紀は「文化の時代」であり「心の充足の時代」だと言われる。これからは文化が新しい価値を創造し、人びとの精神的欲求を満たす時代である。都市や企業もしかりである。人びとの精神性や感性につながる新しい価値創造に応えることができなければ、その都市や企業の活力は自ずと衰退の道を辿ることになるであろう。

いま、確かに東京、大阪、名古屋などの大都市圏においては日々超高層ビルがたち並び、その目新しさと賑いぶりが人びとの注目を集めている。しかし、これからの日本のあり方や都市のあり方を考えるとき、はたしてそういう機能的で合理性を重んじる都市であるだけで住民が喜び、世界に誇りうる都市を構築できるものであろうか。これからの時代においては、政治的・経済的要素だけではなく、国の内外からその地を訪れる人びとの心に響く文化性や精神性を併せもつ都市の存在が重要なものとなるのである。

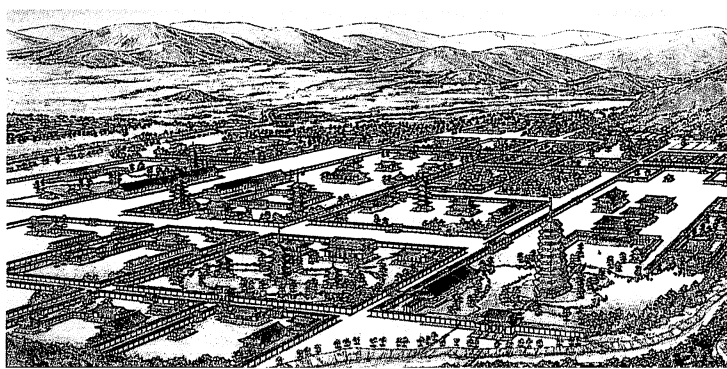
その点、京都は他の都市にはない都としての歴史と、そのもとに培われてきた高度な文化的・精神的作用をおよぼす数多くの

資産を残している。日本古来の歴史があり、伝統文化が存在するのである。これからの時代は、そのことが新しい価値を生み出す源となり、また魅力ともなってくるのである。京都には、いわばそうした日本の歴史や精神性を伝える文化的資源、しきたりといったものがいまなお、まち全体、そして市民生活の端々にまで残っている。このことは、ある意味において科学主義、物質主義にかげりの見えてきた現在、21世紀のこれからの日本のあり方、さらには日本人の心のあり方を展望するうえできわめて重要になってくるものと思われる。

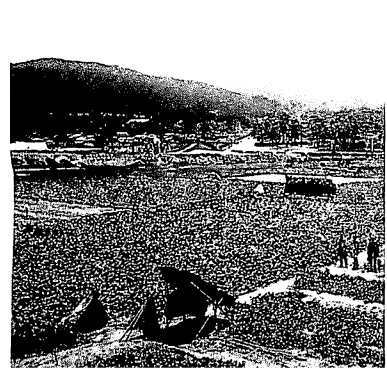
我が国はこれまで、あまりにも経済主義、実利主義に徹しすぎていた。その反面的現象として、もう一方の文化性や精神的な豊かさをおろそかにしてきたように思えてならない。その結果は、膨張主義経済が終焉し、経済成長のスピードが鈍化・停滞した途端に、国民全体さらには国家そのものが目標を見失い、今日の混沌とした社会状況を招くことにつながっている。

この先、実利主義、現実主義だけでは、日本の展望は切り拓けない。我が国は、そろ

平安時代後期の白川六勝寺の伽藍を蹴上のあたりからの眺めを再現した俯瞰図。右下にそびえているのが法勝寺の九重の塔で、現在の動物園あたり(原図・梶川敏夫)



明治中期(1893年)の岡崎。平安時代奥にはすでに完成しているインクラの平安神宮のあたりからウエステイ





そろこのあたりで明確なポリシーとビジョンを備えた文化国家として再スタートしなければならない。そういうとき、日本の歴史や精神文化が、自ずと重要なものになるのである。

われわれは、ここに日本における京都の存在感を強く認識し、この京都を国家的・国民的視点から「日本の文化首都」として十分に活用すべく提起するしだいである。併せて、その具現化の方策として下記の2点を提案したい。

提言 I-1

「京都の 百年ビジョン」を 策定する

京都は我が国を代表する国際文化観光都市である。周辺の山麓部はもとより市内中心部の至る所に、国民のみならず人類の共有財産として、日本の歴史や文化を宿す数多くの資産が存在する。神社仏閣しかり。重要文化財しかり。町並み景観や、四季折々の季節感を取りこんだ市民の暮らししかりである。一方で、京都市は147万もの人口をかかえ、ものづくりのまち、商いのまちとしての日々の営みがある。ここに「大都市・京都」の都市行政の難しさと悩みがある。残念なことに、現実の問題として、せっかくの景観や資産が年々消失しているのが実情である。

京都を京都として、また日本人の文化的・精神的拠りどころとして、より魅力的で活力ある都市にするには、「世界のなかの京都」を強く意識したうえで、欧米の歴史都市を参照しつつ、百年後の視点に立った都市づくりの方向性とビジョンを早急に策定しなければならない。国も関わるかたちでの「京都百年のビジョン」の策定を提起するしだいである。

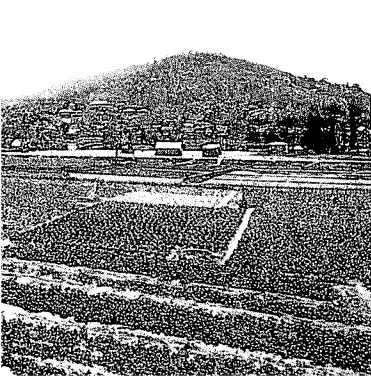
提言 I-2

「文化首都 特別措置法」の 制定を求める

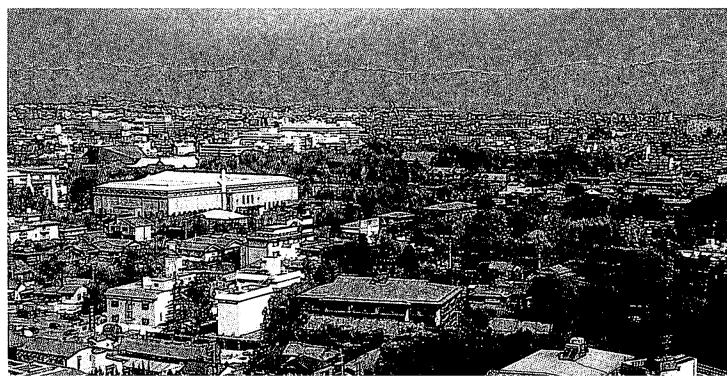
かつて京都は、「千年の都」として隆盛を極めた。しかし、首都が東京に移ってからというもの、その資産や景観はほとんどが地元行政ならびに京都市民によって守らざるをえない状況となっている。この先、京都を日本の文化首都として位置づけて国家的に活用するには、まずは国家予算の面から、そして相続税等の税制、さらには都市づくりに関する各種法的問題をも包含しての特例的措置が強く求められるのである。

ここにわれわれは、「文化首都・京都」の国家的の位置づけと、これを具現化するための「文化首都特別措置法」の制定を提起するものである。

の面影はないが、左
インが見える。現在
ンホテル方面を望む



蹴上から望む岡崎の現在。百
年後の岡崎はもう一度、大き
く変容するかもしれない





提言Ⅱ

千年の都 具現

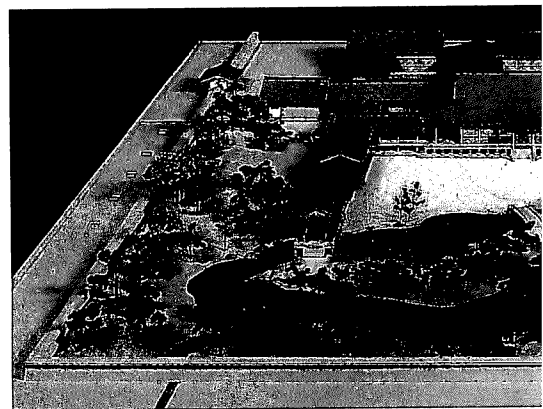
千年余にわたる都であった時代の京都は、日本の文化・文明を創成し、神仏共存の思想、自然と親和し共存する暮らしや美意識を育み、熟成してきた。21世紀の人類は、地球という閉ざされた場を共有しながら、歴史と文化を異にする民族や国家、多様な宗教や文明を共存させることになる。そうした時代に間違いなく貢献できるのは、京都が千年余にわたって蓄積してきた思想や生き方や美意識であろう。それらが如何なるものであるかを地球的視野のもとで究明するとともに、京都を訪れる誰もがそうしたものを具体的に実感できる装置を用意する必要がある。

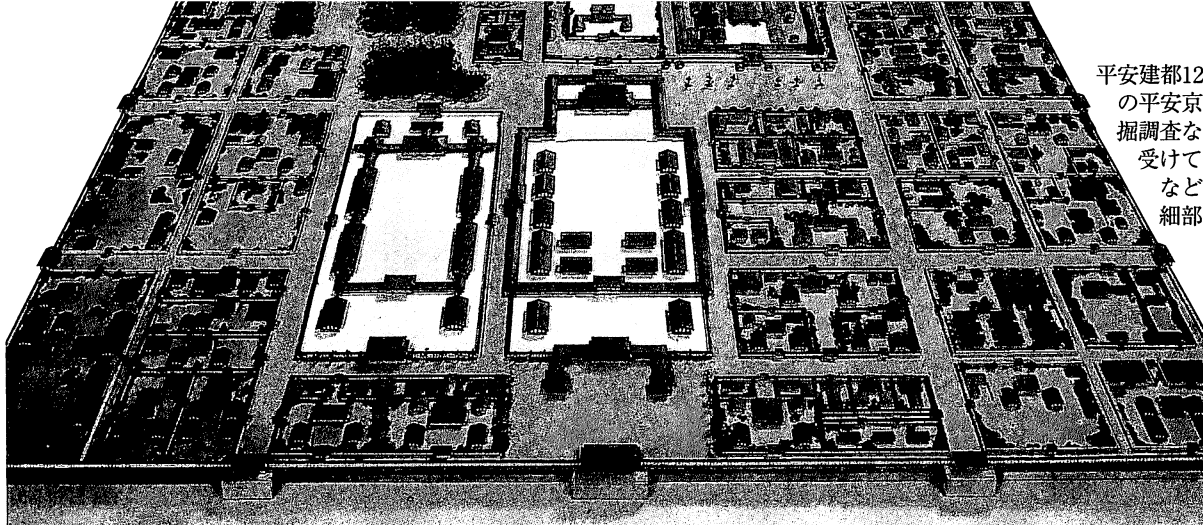
京都の魅力は、平安京遷都から近代に至る日本の歴史と文化と生活が、都市そのもののの中に具現されていることにある。公家、僧侶、神官、武家、町衆の文化が互いに触発し、融合し、棲み分けながら、今も息づき、それを自然の青垣（西山・北山・東山）

が取り囲んでいる。そうした知の風景、魂の安息所を最高のかたちで保全し、後世に伝えなければならないのである。

とはいえ、京都の中心街は近代的なビルに圧倒されて、伝統的な町家がつくる景観は危機に瀕している。観光名所の建築物、庭園、文化財などは、もっぱら中世や近世を感じさせるものばかりである。平安時代ともなれば、創建時の面影を残す古社寺の他には、京都御所内に残されている紫宸殿、建都1100年を記念して朝堂院などを縮小復元した平安神宮くらいしか見あたらない。王朝文化、公家文化の姿は薄いのである。世界文学史上の傑作『源氏物語』を生み出した平安京を彷彿とさせる新しい歴史的名勝の創造が求められる。

さらにまた、京都は千年の歴史において、東寺五重塔、金閣寺、二条城など、時代を画すランドマークをつくってきた。21世紀の最先端技術と伝統技術を融合した木造の超高層建築「人類の塔」をつくり、それを国際的な知の交流拠点、情報発信の拠点としたい。





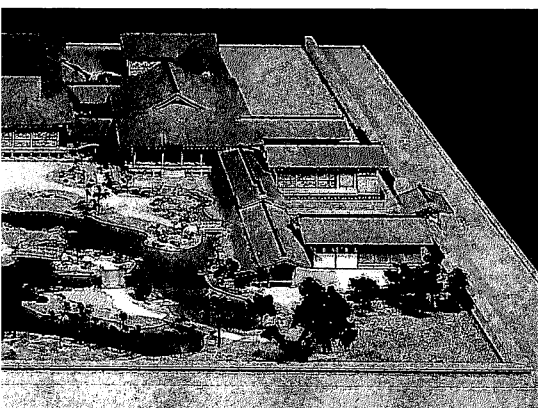
平安建都1200年を期に制作された1000/1の平安京模型による配置図。近年の発掘調査などの目覚ましい研究成果を受けて、太極殿や豊楽殿、二官八省などの官衙や内裏の間取、外観の細部までが明らかになりつつある

提言 II-1

文化首都に ふさわしい 都市づくりに努める

日本の文化首都として、世界に情報発信する歴史都市・観光都市・宗教都市・大学都市・文化芸術都市としてふさわしい町並みや景観への積極的な対応を提言する(町家の保存と活用、看板規制、電線地中化など)。京都の景観は、千年の歴史と文化を顕現するものでありたい。その維持や整備のために、税法上の特例措置を求める(町家や文化財保存を目的とする相続税特例措置の導入や、特別地区を設置して生産緑地と同様に税を軽減する)。

また、衣食住に関わる博物館や生活文化館などを、既存の建物を有効利用して街なかにつくり、それを博物館や美術館などとネットワークで結び、京都が蓄積してきたライフスタイルや伝統文化を体感できるようにする。



東三条殿(復元模型)。左京三条三坊に所在した平安時代を代表する邸宅。藤原長房が創設し、一条天皇の里内裏にもなった。『年中行事絵巻』など、多くの資料をもとに復元

提言 II-2

歴史的 新名所を 再建する

現在の京都には、「平安時代以来の千年の都」であったことを示す建造物が少ない。中世以降の文化と比べて、王朝文化は影が薄いのである。千年の歴史・文化を体感しようにも、その装置がないから、観光資源としても物足りない。千年の文化を具現するには、仙洞御所(京都御苑内)、嵯峨離宮(大沢池北畔)、羅城門(九条通)、寝殿造(岡崎もしくは京都御苑内)など、公家文化を蘇らせる建造物を再建する必要がある。

また、皇族の宿泊に使われる大宮御所(京都御苑内)を改修して、重要な国家行事や皇室行事の折にはできるかぎり天皇陛下に京都へお戻りいただく。

100年後を見すえながら、かつて太極殿などのあった千本丸太町周辺の土地(東西約400m×南北約200m)を数十年かけて買収し、太極殿を再現するなど、平安時代を体感できる建物をつくってはどうか。長期間かけることを前提にすれば、現在の土地所有者・住民との軋轢の少ない買収方法もいくつかあるはずである。



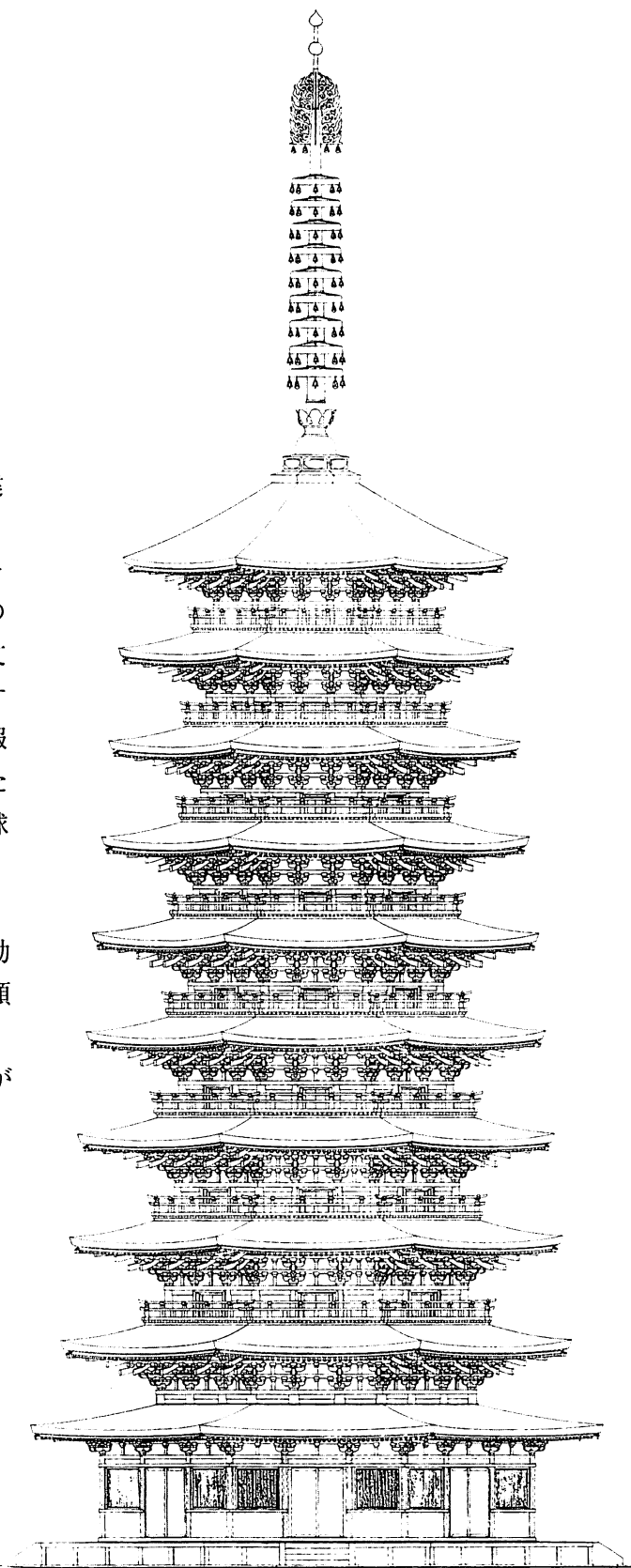


提言 II-3

木造建築による 21世紀の ランドマークを

21世紀の京都を象徴する木造の超高層建築物(100メートル超)をつくる。これを、西安の大雁塔、パリのエッフェル塔、ニューヨークの自由の女神像に匹敵する「人類の塔」として建設し、そこに京都(日本)の文化や精神を学び伝える「京都塾」、後述する「国際宗教研究所」、芸術・文化の情報発信センター、京都の伝統料理を核にした「食文化館」などを入れて、21世紀の地球に情報発信する一大文化総合施設とする。場所としては岡崎の動物園を別地へ移し、その跡地に建設することがふさわしい(動物園のある場所は11世紀に白河天皇の御願により建立された壮麗な法勝寺の跡地で、ここには高さ90メートル近い八角九重塔があった)。

八角九重の塔。苑池の中の島に高さ2丈の檜皮葺の塔がそびえていた。落雷で焼失したが、いまでもその基壇の一部が残っている





提言Ⅲ 宗教・芸術・学問の再興の都

京都は長らく日本の宗教、芸術、学問の中心地でありつづけている。平安時代に最澄によって開かれた天台宗や空海の真言宗をはじめ、鎌倉期にはじまる日蓮宗、臨済宗、浄土宗、浄土真宗などの各派の芽もまたこの地で育まれ、それらの総本山はいまも京都に集中する。これらの教団は、時代ごとにみごとに宗教芸術を開花させた。江戸時代には四条派をはじめ多くの絵師たちが当時の都市文明を寿ぐ華麗な作品を残

し、明治期には京都画壇の数多くの巨匠が東京画壇と双璧をなした。

学問の面でも、宮廷の大学寮はもとより、寺社や町方の学問所の系譜が幾多の戦乱を越えて近代につながり、同志社大学や京都大学をはじめとする大学を林立させた。いまも、市域に本拠を据える大学や短大が36を数え、人口の10人に1人が大学生であるという屈指の学都としての光彩を放っている。

その独創力のあるものづくりや研究の風土は、多くのユニークな才能と業績を生み出してきた。この半世紀に限っても、日本人初のノーベル賞を受賞して戦後復興の日本に勇気と希望を与えた湯川秀樹博士から島津製作所の田中耕一氏まで、我が国の同賞受賞者のうち、京都にゆかりのない人はごくわずかである。

世界が新しい理念を求めて大きく転換しようとするなか、宗教、芸術、学問という三つの営みが文を織りなしてきた京都の風土は、世界の多くの人びとと共有しうる、はかりしれない価値と創造性をはらむものである。混迷とともに始まった21世紀が求めている光明がどこからかもたらされるとすれば、一つには国の内外をあげて京都のそのような蓄積を再発見し、その文明の精神を現代世界にふさわしいかたちで蘇生させることを通じてではないであろうか。

その再生にむけての人類共同の歩みを着実なものとするには、以下のような組織の開設、行事の継続遂行が考えられる。ただしそれは、文明にとっての不可欠の要素である「仲立ち」の機能をふんだんに発揮するための慎ましさと、しなやかさを兼ねそなえた適正規模のものであることが重要な条件である。





提言 Ⅲ-1

文運推進機構 「京都会議(仮称)」を 創設する

科学や技術によって肥大化の一途をたどってきた人間の欲望は地球環境の深刻な劣化をもたらしつつ、いまや事態は危機的と目されるに至っている。しかしながら、専門分化のはげしい現代学術は、有効な貢献を何らなしえない分断状況におかれており、この未曾有の地球規模の大問題の解決には微力である。

しかし、京都は古くから学びを専門家だけに委ねない習いが強い。一見奇異な説や無謀とも思われる夢想に対しても開かれた精神で議論し、共同で再考する過程を楽しむ都市性が息づいている。「草木国土悉皆成仏」という言葉に代表されるように、人間だけを特別視しない伝統も強い。京都のこのような精神文化を現代世界の重大課題と対峙させることへの期待は大きい。

京都では、近代以前から諸々の芸道の修行の場において、近いところでは共同研究や共催行事において、宗教、芸術、学問の粋をひきあわせようとする試みが数多くなされてきた。それらは、京都のさまざまな所に、貴重な智慧の記憶として蓄えられている。

21世紀の地球を輝かせる文明を創出するため、武運ではなく、諸分野が文を織りなす文化のうねり、すなわち文運を高める手だてとして、丁寧なしつらいと、人づきあいの育てと、成果の有効な表現とで、学界を越えて世界的な認知を受ける「京都会議」の創設とその年中行事化を提案する。支援母体は、国はもとより、国際的な組織から地域固有の集まりや個人まで、組み合わせの質を考慮した集合体であることが望まれる。

提言 Ⅲ-2

京都を 「文明」の思索と 実践の拠点に

祈ること、表現すること、学ぶこと——この三つの営みは、もとは一体のものであった。さらに、その一体の状態が人びとの日々の暮らしの中でいきいきと保たれていることが、「文明」という「天地人が文^{あや}をなして輝く世」を支える条件であった。しかし、産業革命以降の節度を失った人間活動の果てに、この三つの営みは分断され、専門家の手に委ねられてしまうことで小さく固まり、多くはあたかも社会の飾りのごとく周縁へと追いやられた。

そのような現代世界にあって、たんなる精緻なシステムにとどまらない、古典的な字義に悖^{もと}ることのない「文明」への道が地球規模で探られようとしている。しかも、「その思索と実践の拠点となりうるかけがえのない場の一つが京都である」との認識が、国の内外に高まっている。京都に関わる人や組織は、この価値と役割とを認識して行動するよう努めていただくと同時に、このことを日本の政治家をはじめ、多くの指導者たちが真摯に受けとめるよう訴えつづける必要がある。





提言 Ⅲ-3

国際 宗教研究所を 設立する

東西冷戦が終焉したあとの21世紀の世界は、各地で宗教の違いに起因する、あるいは宗教の違いが増幅させる深刻な地域紛争が後を絶たない。日本は歴史上、いわゆる宗教戦争なるものを経験したことのない世界でも珍しい国である。その根本には、古来から連綿とつづく神仏共存の寛容の思想がある。

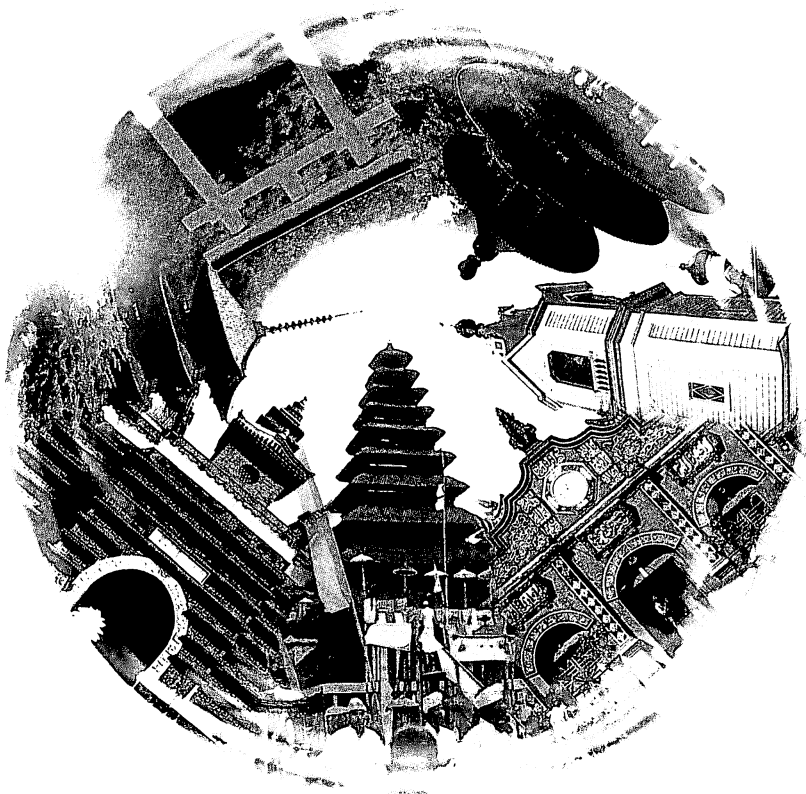
そのような伝統宗教の中心地である京都は、道教、ヒンドゥー教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教をはじめ、世界のあらゆる宗教の研究者や実践家が集まるうえで、まさしくふさわしい土地である。日本の神仏共存思想の研究を中心に、現代社会への強い関心に支えられた比較宗教学の立場から、平和と文明の原理となる祈りのあり方、表現のあり方を探ることは、人類社会の未来に大きく寄与することになる。

提言 Ⅲ-4

生命倫理 のための 国際機関の設立と誘致

科学技術の急速な進歩に伴い、人類はいまや遺伝子操作によるクローン人間の誕生など神の領域に踏み込み始めている。これは人類に利益をもたらすという意見がある一方、人間がそこまで手を下してよいのかという倫理面での問題を指摘する声も強い。とにかく、生命科学なるものは、西欧ルネッサンス以来の人間観、自然観や世界観に関わる一大変革をもたらそうとしていることは確かである。

上項でも述べたように、伝統仏教の土壌のある京都で、人間の生命と尊厳に関わる倫理についての世界会議を開催することは、人以外の生命の重みを忘れない創造的な思考を刺激することになるであろう。このような機会を通じて、世界に通用する価値観を発信する意義は大きい。また、ユネスコなどの生命倫理に関する国際機関を招致する。



神仏共存の寛容な思想が流れる
京都は、世界の宗教の研究者や
実践者が集う場にふさわしい





提言Ⅳ

京都からの情報発信

かつて都であった時代の京都は、多様なもの、異質なものが出会う場であり、そこから新しい生活文化や芸術を創造していった。京都が都である間は、おのずから人が集まり、またあらゆる情報が全国に発信されていった。東京遷都以降、そうした首都機能は失われ、京都は自ら、多様なもの、異質なものが出会う場と機会をつくり、持続性があるインパクトがある情報発信装置をつくり出さなければならなくなった。

しかし、東京が司馬遼太郎の言う「近代の配電盤」として情報発信機能を高めていったのに対し、近代の京都は、自前の発信機能を創り出し、育成していくことに無関心であった。そのため、京都に関することといえば、東京が望むような「日本の伝統文化を残す古都」としての情報発信しかされなくなる。京都からの独自の情報発信は無視されるか、ほとんどなされなかった。また、京都には、宗教・芸術・伝統文化などの多彩な蓄積があるが、それが有効に組織されることなく、それぞれの分野で「我のみ尊し」とタコツボにこもってしまっている。こうした現状を転換しなければ21世紀の京都が自らの価値を世界に問いかけることは不可能である。

京都が自らの価値を世界に問いかけるにあたっては、それを可能にする恒常的な組織のみならず、出会いの場をつくり、多様な

人たち、異質な人たちを会わせ、新しいものを創出していく有能なプロデューサーが欠かせない。また、京都から恒常的に情報発信できる自前の媒体をもたねばならない。それには、中央集権的な近代の媒体ではなく、最先端の情報技術やインターネットワークを積極的に活用する必要がある。

提言Ⅳ-1.....

情報を 恒常的に発信する 組織をつくる

いま、京都がなさなければならないのは、自らのもつ多様な文化や人材をネットワーク化し、それを会わせ、新しい思想や文化を生み出す場と装置をつくりだすことである。それを実現するためには、京都の叡智を結集し、21世紀の地球にむけて京都のあるべき姿を提言する恒常的な組織が不可欠である。





提言 IV-3

インターネット による 情報発信を推進する

1,200年にわたる多様な伝統文化や人材のデータベース化、ネットワーク化を促進し、インターネットで世界からアクセスできるようにする。それを行政、財界、学界がばらばらにやるのではなく、21世紀の京都を見すえて、大きな構想のもとで恒常的に押し進めていく必要がある。

インターネットを活用した情報発信としては、次のようなものが考えられる。掲示板のかわりを携帯電話で行ない、京都を「京都ユビキタス・ミュージアム」にする。先端的な映像技術を使って千年の京都をインターネット上で疑似体験できるようにする。こうしたことは、先に提言した「歴史的新名勝をつくる」、「21世紀の祭りをつくる」などと連動させ、五官で京都の精神文化を体感できるものにしなければならない。

15

提言 IV-2

21世紀の 祭りをつくる

二条城、寺社、岡崎、鴨川畔などの公共空間を現代の文化・芸術空間として再生させ、既存の伝統行事や祭りを活性化するとともに、新しい21世紀の祭りをつくる。たとえば、時代祭を特定の日曜日に開催して「現代ファッション・ショー」を加える、祇園祭にハイテク産業や大学を参加させて「ハイテク鉦巡行」を加える、京都の全大学が参加する「音楽フェスティバル」や「大学演劇祭」を開催する、などが考えられる。また、現代ファッション・ショーなどと連携して、京都にふさわしい「京都デザイン大賞」を創設し、それを祭りに組み込んでいくことも考えられる。

そうしたことによって、京都に「風流」、「かぶき」の熱狂的な祭りをつくり出し、京都の一年を21世紀にふさわしい年中行事と祭りで切れ目なく埋めていくことが求められる。



インターネットとケータイは、個別で多様な情報ニーズに応えるものとして発展することはまちがいない





21世紀委員会委員 (順不同・敬称略／平成15年3月31日現在)

●座長

山折 哲雄 国際日本文化研究センター 所長

●委員長

吉田 忠嗣 代表幹事／吉忠(株) 代表取締役社長

●委員

芳賀 徹 京都造形芸術大学 学長

杉田 繁治 国立民族学博物館 副館長

横山 俊夫 京都大学大学院 地球環境学堂 三才学林 学林長

白幡洋三郎 国際日本文化研究センター 教授

小松 和彦 国際日本文化研究センター 教授

中村 順一 (財)国立京都国際会館 館長

高城 修三 芥川賞作家

高木 壽一 京都市 副市長

吉澤 健吉 (株)京都新聞社 編集局文化報道部 情報担当部長

内田 昌一 代表幹事／京都青果合同(株) 代表取締役会長

久保 智暉 副代表幹事／久保商事(株) 代表取締役会長

永田 萌 (株)妖精村 代表取締役社長

藤本 圭司 (社)京都経済同友会 常任幹事事務局長

●資料準備委員

中村 基衛 京都通信社 代表

●事務局

森田純一郎 (社)京都経済同友会 事務局次長

中山 愛子 (社)京都経済同友会 事務局員

2003年10月 発行

発行者 社団法人京都経済同友会

京都市中京区烏丸通夷川上ル 京都商工会議所ビル内
〒604-0862 TEL.075-222-0881 FAX.075-222-0883

制作協力 京都通信社

デザイン 納富 進



